

# 越中ソ関係, 1964年-1980年

—探索的分析—

猪 口 孝

## 1 序 論

ベトナム、中国、ソ連の3国は社会主義国の中で最も人口の多い国であり、世界の中で最も陸軍の大きい国である。順に、5200万人、9億7100万人、2億5800万人の人口と、100万人、360万人、180万人の陸軍をかかえている<sup>1)</sup>。その中で、ベトナムは1973年のパリ停戦協定まで米国を正面から相手にして、それを1975年の撤退に追いこんでいるし、しかも小規模とはいえ、1969年に中国とソ連が、1979年にベトナムと中国が、武力衝突している。いいかえると、越中ソ関係は最近20年の歴史からみると、軍事紛争がきわめて重要な意味あいをもっている国際関係であることを示している。

1945年以後の越中ソ関係をみると、いくつかの重要な特徴がすぐに目に付く。まず第1に、ベトナム民主共和国がソ連の承認を受けることがかなり遅く、1950年の2月、中国による承認の後になってはじめてなされていることである。第2に、中国とソ連の関係は中国の共産主義政権成立後10年たらずで急速に悪化していることである。第3に、1975年以後、ベトナムと中国の関係が急速に悪化していることである。第4に、中国とソ連のベトナム支援のパターンが1968年を境にして立場をいれかえていることである。

(1) ベトナムの共産主義政権は旧宗主国フランス及び新覇権国米国の介入

のために、その全面的征覇を妨げられ、1945年から30年間、闘争を続けることになった<sup>2)</sup>。ひとつには、その政権の脆弱さのため、ひとつには、ソ連のベトナム軽視とソ連自体の脆弱さのために、ベトナム共産主義政権の承認は中国の共産主義政権ができてまもなくの1950年になってようやく行なわれた。その後も、ハノイの眼からみると、ソ連と中国のその解放闘争に対する支援はきわめて不満足なもので、とりわけ1954年の対仏譲歩和平における中ソの圧力、1968年のテト攻撃に対する支援の不十分さ、1975年の南部軍事解放に対する、とりわけ中国の支援の少なさについてそうであった。

(2) 中ソ紛争は、中国第1次5カ年計画の遂行過程におけるソ連の発展モデルとソ連の援助についての中国の留保や不満が対米関係の問題とも大きくからんで、1950年代末までにかかなりの程度にまで発展し、1960年代に入ってその対立が公開されることになった<sup>3)</sup>。その後、中印紛争、キューバ危機、核停条約、そして第2次ベトナム戦争、チェコスロバキア介入を経て、中ソの対立は激化していった。そのひとつの頂点は1969年の中ソ国境武力衝突である。その後しばらく現実的和解の動きが短期間みられたあと、社会主義国家間の国際関係というよりは、敵対する体制間の国際関係に使われる原則である「平和共存」が中ソ関係の基調となった。

(3) 1968年のテト攻勢、同年のソ連のチェコスロバキア介入を通して次第に明らかになり、1973年の米国軍のベトナムからの撤退、そして1975年の南部武力解放を最終的には契機とした中越の対立は、1979年の中国のベトナム進攻へと発展した<sup>4)</sup>。1968年のテト攻勢を機として米国はベトナム介入の縮小へと向い、1975年南部解放に対して米国が拱手傍観していたことは中国をして、主要な敵についての認識を大きく変化させた。米国はソ連の覇権主義に対して同盟すべき相手となっていったのである。1968年のソ連のチェコスロバキア介入に対して、中国はいうまでもなくユーゴスラビアやルーマニアとともに反対しているが、ベトナムはこれを支持している<sup>5)</sup>。1969年の中ソ衝突までに、中国は反中のソ越同盟の可能性の悪夢的脚本に気付いたと思われる。

(4) 第2次ベトナム戦争に対する中国とソ連の政策は、1968年から1973年までの間に次第に立場を変えていく。1968年以前、中国は武力闘争を中心とする解決を支持していたのに対し、ソ連は政治解決をどちらかといえば選好していた<sup>6)</sup>。米国に対する軍事的脆弱性を1962年のキューバ危機によって屈辱的に認識させられたソ連が、時間かせぎのために米ソ軍事対決の可能性をひめるベトナムの軍事解決よりは政治解決を好んだことに無理はない。ところが、1968年以後次第に、米国の覇権意志が衰えてきたと認識されるに従って、中国はアジア、とりわけ東南アジアに米国がある程度軍事的に存在した方が、ソ連の全面的覇権よりもよいと考えるようになった。そして、ベトナムにおける政治解決を望むようになったわけである。ソ連は逆に、軍事力伸長にともなう自信の増大に従って、ベトナムの軍事解決をとりわけ1973年以後、支援するようになっていく。

この小論では、越中ソ関係にみられるこのような大きな変化を、よりよく理解、説明するための準備作業のひとつとして、『ニャンゼン』、『人民日報』、『プラウダ』の3紙にみられる国家的記念日に交わされる祝賀電報を主たる素材にして、このような変化の一端をできるだけ精確に把握しようとするものである。越中ソ関係については、すでにかなり多くの研究があるが、この小論のような体系的データをもとにしているものはないようである。また、この小論の主題に関係したものとして、私は2つの種類の研究を行なったことがある。ひとつは、中国のベトナム介入についてのもので、1788-89年と1979年の介入を、国際環境、国内権力基盤、そして権力視角について比較検討したものである<sup>7)</sup>。もうひとつは、北朝鮮、中国、ソ連の関係を『労働新聞』、『人民日報』、『プラウダ』の3紙にみられる国家的記念日に交される祝賀電報を素材にして跡づけたものである<sup>8)</sup>。これらの研究を踏まえてなされるものであるが、この小論は主として予備的探索的目的をもってなされ、これに続く研究では、軍事力の分布と対外行動の方向についてより深い分析をすすめたいと考えてい

る。

この小論の構成は次のとおりである。まず次章ではベトナム、中国、ソ連が祝電を通じてお互いに訴える政策主題を分析する。「社会主義陣営の統一と団結」、「反覇権主義」、「反帝国主義」、「平和共存」の4つをとくにとりあげる。次の第3章では、友好敵対度をなすものとして、次の定句を分析する。「マルクス・レーニン主義」、「プロレタリア国際主義」、「レーニン主義」、「唇齒」、「同志兄弟」、「平和共存」、「内政不干渉」である。最後に、内容には直接関係のない祝電の属性から友好敵対度の測定を行なう。これらの3つの作業を通して、越中ソ関係の展開についての洞察を深めたいと思う。

## 2 ベトナム・中国・ソ連の訴える政策主題

ベトナム、中国、ソ連の3国の間において、1960年頃から1980年頃までの20年の間、おそらく最も重要な政治課題は「社会主義陣営の統一」か「覇権主義への反対」の選択、「帝国主義に対する軍事解決」か「政治解決」の選択であったろう<sup>9)</sup>。

1960年から公開された中ソ対立の重大イシューのひとつは、ソ連が圧倒する社会主義陣営の中の一員として振舞うか否かということであった。もうひとつのイシューは、帝国主義に対抗する戦略として、現地の民族解放勢力の武装闘争を支持するか、あるいは帝国主義との力関係をも考えて政治解決を支持するか、ということであった。1965年から激化した第2次ベトナム戦争(1959-1975)においても、同じ2つのイシューが突出した。すなわち、アメリカ帝国主義に対して小異を捨てて大同につき、ベトナムの闘争を共同で援助するかどうか、そして、南部の武力解放を遂行するか政治的妥協を図るかの問題であった。

3国の戦略の違いを図式的にいうと、ベトナムは社会主義陣営の統一と団結と帝国主義に反対する軍事解決を唱えていた。(もちろん、戦術的に、必要に応じて政治解決を唱えていたが。)中国は修正主義あるいは覇権主義あるいは社

会帝国主義と帝国主義とに対する同時闘争を唱えた。同時に、帝国主義に反対する闘争、とくにベトナムにおけるものとしては、はじめは、軍事解決、しかも人民戦争と自力更生の原則によるものを支持していたが、のち政治解決を支持するようになった。ソ連は社会主義陣営の統一と団結を一貫して唱えた。同時に、帝国主義に対して、はじめは政治解決に重点のかかった戦略を支持していたが、のち軍事解決をよりひんぱんに支持した。

ここでは、「社会主義陣営の統一と団結」、「反覇権主義」、「民族解放のための軍事解決」と「政治解決」、これらの2つの大きな対立を分析することにしよう。「民族解放のための軍事解決」と「政治解決」の主題については、それに完全に適合する定句が祝電の中では必ずしも使われない。そのため、「反帝国主義」と「平和共存」の2つの主題を調べることによって、「民族解放のための軍事解決」と「政治解決」の主題に対する洞察を得ようとする。「反帝国主義」は「軍事解決」、「政治解決」のどちらを主張しようと原理的には共通なものであるが、どの程度、この主題を強調するかをみることは「軍事解決」を好むか、「政治解決」を好むかについてさぐろうとするとき役立つものである。「平和共存」の主題は多くの場合、敵性国家に用いられる定句であるが、資本主義国家に用いられる場合と社会主義国家（少なくともそう自認している国家）に用いられる場合とがある。ここで興味があるのは前者であり、資本主義、帝国主義陣営に対して、現段階では不必要な挑発を避け、平和を維持し、その間に社会主義陣営の力量を高めようとするものである。この意味での「平和共存」の主題を強調するときは「民族解放のための政治解決」を唱えているとみてほぼまちがいないのである。

## 2. 1 ベトナムの訴える政策主題（表1）

ベトナムが中国とソ連に訴える主題は、ほとんど「社会主義陣営の統一と団結」と「反帝国主義」である。1978年、越中関係の緊張が高まる過程で「平和共存」を訴えているのが唯一の例外である。中国に対してのアピールで顕著な

表1 ベトナムが訴える政策主題

VVC	社会主義陣營 の統一と団結	反覇権 主義	反帝国 主義	平和 共存	VVS	社会主義陣營 の統一と団結	反覇権 主義	反帝国 主義	平和 共存
1964	1	0	3	0	1964	1	0	1	0
1965	4	0	8	0	1965	1	0	2	0
1966	2	0	5	0	1966	2	0	3	0
1967	4	0	5	0	1967	4	0	4	0
1968	2	0	6	0	1968	2	0	2	0
1969	1	0	2	0	1969	1	0	1	0
1970	1	0	3	0	1970	2	0	2	0
1971	1	0	2	0	1971	1	0	3	0
1972	1	0	3	0	1972	2	0	2	0
1973	1	0	1	0	1973	3	0	1	0
1974	3	0	3	0	1974	2	0	1	0
1975	1	0	2	0	1975	2	0	1	0
1976	0	0	1	0	1976	2	0	0	0
1977	2	0	1	0	1977	3	0	2	0
1978	1	0	0	1	1978	2	0	0	0
1979	0	0	0	0	1979	0	0	0	0
1980	0	0	0	0	1980	4	0	1	0

のは、1968年をターニング・ポイントとして「社会主義陣營の統一と団結」と「反帝国主義」の両者の主題が少なくなっていくことである。1974年、軍事解放を目前にして、両者の主題を強くアピールしていることも目立つ。その後は、次第になんらの主題もアピールされなくなる。1976年に、中国に対して、「社会主義陣營の統一と団結」の主題をアピールすることを一時やめた後、1977年にまたアピールし、その後1978年には、その主題とあわせて、敵性国家の間の関係にひんばんに使われる「平和共存」の主題がアピールされているのである。いいかえると、1978年の段階では中国について和戦両様の両面的アプローチが観察されたということかもしれない。その後、どちらの主題も消滅する。

ソ連に対しては「社会主義陣營の統一と団結」と「反帝国主義」の主題もアピールしていないことは、なにかがあったことを思い起させる。また、1976年

と1978年には、「反帝国主義」の主題が訴えられていないことも目につく。1976年以降、「反帝国主義」というよりは反中国の主題が強くなったことからすれば、部分的には当然のことかもしれない。1968年以降、アピールの度合いが弱まっているように見えるのは、中国に対する場合と同じである。1968年の軍事攻勢に対する中ソの支持の不十分さはベトナムにとって身にこたえたのであろう。

## 2. 2 中国の訴える政策主題 (表2)

中国はベトナムやソ連とちがって、祝電を送らなかつたり、あるいは掲載しなかつたりすることが多い。ベトナムに対しては、1975年を除いて、1973年以降、ソ連に対しては、1967年、68年の文革期と1973年以降1977年を除いて、祝電は少なくとも掲載されていない。1969年～1972年は1969年の中ソ国

表2 中国の訴える政策主題

CCV	社会主義陣營 の統一と団結	反覇権 主義	反帝国 主義	平和 共存	CCS	社会主義陣營 の統一と団結	反覇権 主義	反帝国 主義	平和 共存
1964	1	0	1	0	1964	2	0	2	0
1965	0	0	4	0	1965	1	0	2	0
1966	0	0	5	0	1966	0	0	0	0
1967	0	1	2	0	1967	0	0	0	0
1968	0	5	2	0	1968	0	0	0	0
1969	0	4	2	0	1969	0	0	0	0
1970	0	0	2	0	1970	0	0	0	1
1971	0	0	1	0	1971	0	0	0	1
1972	0	0	2	0	1972	0	0	0	1
1973	0	0	0	0	1973	0	0	0	0
1974	0	0	0	0	1974	0	0	0	0
1975	0	0	1	0	1975	0	0	0	0
1976	0	0	0	0	1976	0	0	0	0
1977	0	0	0	0	1977	0	0	0	1
1978	0	0	0	0	1978	0	0	0	0
1979	0	0	0	0	1979	0	0	0	0
1980	0	0	0	0	1980	0	0	0	0

境紛争の起こってからの中国指導部の慎重さを示すのかもしれない<sup>10)</sup>。1973年～76年はソ連の脅威を政治的な転覆を図る可能性としてとらえる「四人組」の対外政策を反映しているのかもしれない<sup>11)</sup>。1974年に祝電は送られたことが確認されているが、『人民日報』には掲載されていない<sup>12)</sup>。1977年のは鄧小平の2回目のカムバック直後にみられた対ソ慎重路線を反映しているのかもしれない。

ベトナムに対するアピールをみると、1964年を除いて、「社会主義陣營の統一と団結」はあらわれない。1965年からは、「反帝共同行動」のアピールがベトナム、ソ連、中国の反文革派、北朝鮮などで力を得たのである。「反帝国主義」の主題はとりわけ1960年～1966年に強調される。パリ休戦協定成立の1973年以降は解放の年、1975年を除いて、祝電が掲載されていないため、わからない。「反覇権主義」（この場合は反ソ）の主題は1967年～1969年の文革期に強調されるが、その時期だけで途切れている。

ソ連に対して、1964年、1965年、「社会主義陣營の統一と団結」をアピールするが、それ以降は消滅している。「反帝国主義」についても、覇権主義、社会帝国主義と規定されたソ連に対して、アピールするのは無意味なことで、1964年、1965年に言及されるに留まっている。「平和共存」については、敵性国家と認められ、しかも軍事的脅威を強く感じていた1970年～1972年にアピールされており、そして鄧小平のカムバック後の1977年にも出現する。

### 2. 3 ソ連の訴える政策主題（表3）

ベトナムに対して、4つの主題すべてを訴えている。「社会主義陣營の統一と団結」の主題は、1971年を除いて継続的に言及されている。1971年の例外がどのような考慮によったものかは不明である。「反覇権主義」（この場合は反中国）は1978年以降必ず言及されている。「反帝国主義」はパリ協定の1973年以降言及されていない年が相当でてきている。「平和共存」（この場合は、資本主義・帝国主義陣營との）は時々言及されている。米国の大規模な軍事介入



表3 ソ連の訴える政策主題

SSV	社会主義陣營 の統一と団結	反覇権 主義	反帝国 主義	平和 共存	SSC	社会主義陣營 の統一と団結	反覇権 主義	反帝国 主義	平和 共存
1964	1	0	3	0	1964	1	0	0	0
1965	1	0	4	0	1965	1	0	0	0
1966	1	0	2	2	1966	2	0	1	0
1967	2	0	3	1	1967	1	0	0	0
1968	1	0	2	1	1968	0	0	0	0
1969	1	0	3	0	1969	1	0	0	0
1970	1	0	1	0	1970	1	0	1	0
1971	0	0	2	0	1971	1	0	0	0
1972	1	0	1	1	1972	1	0	0	0
1973	1	0	0	1	1973	0	0	0	0
1974	2	0	0	0	1974	1	0	0	0
1975	1	0	0	0	1975	0	0	0	0
1976	2	0	1	1	1976	0	0	0	0
1977	2	0	0	1	1977	0	0	0	0
1978	1	1	1	1	1978	0	0	0	0
1979	1	1	1	0	1979	0	0	0	0
1980	1	1	0	0	1980	0	0	0	0

開始後の1966年、1967年、1968年に言及されているのはうなずける。この間、ソ連は政治解決（妥協）の線でベトナムを説得しようとしているのである。ニクソン政権が平和のための軍事圧力を強めていた1972年、1973年にも言及されているが、ソ連はやはりこの時期にも政治解決（妥協）の線でベトナムを説得しようとしたのである。解放後の1976年～1978年にこの主題が言及されているが、これは、1973年前後から開始した東西緊張緩和に対してその路線の踏襲を言及したものと思われる。

ソ連は中国に対して訴える頻度が少ないといえる。「社会主義陣營の統一と団結」の主題は1968年、1973年を除いて1974年までアピールされていることは注目に値する。これに対し中国は、1960年代中葉からほぼ完全にこの主題を無視している。1968年は文革の真最中であること、1973年は最も反ソ的な「四人組」の権力掌握の最初の年であることなどから、言及されなかったの

かもしれない。「反帝国主義」はしかし、1966年と1970年に言及されているのである。なぜこの2年だけ「反帝国主義」がアピールされるのかは不明である。「平和共存」は「社会主義陣営の統一と団結」の主題が言及されなくなってからほどなくアピールされる。1977年にはないが、1970年代中葉でソ連は中国を平和共存するしかない敵性国家と認めたことを示しているとみてよいであろう。

### 3 友好敵対度を示すものとしての定句

友好敵対度を示すものとして、さきに調べたもの5種類のほかに、実質的内容に立ち入ったものがある、ここで扱うのは、各国および各二国間関係について、「マルクス・レーニン主義」、「プロレタリア国際主義」、「レーニン主義」、「唇齒」、「同志兄弟」、「平和共存」、「内政不干涉」の7種類についてのみ調べる。(表4)<sup>13)</sup>

「マルクス・レーニン主義」、「プロレタリア国際主義」と「レーニン主義」は、社会主義陣営では伝統的な定句であり、一般的にいて関係が良好である時ないし良好であってほしい時に、また当該国が「適切な」振舞いをしていることを主張する時などに使われるようである。

「平和共存」は、マルクス・レーニン主義国家と自認している国家がそうでないと認める国家との、通常的な意味ではしばしばよくない関係を記述するために使われる句である。「内政不干涉」は普遍的に使われる句であるが、ここでは「平和共存」の場合と同じように、あまり仲の良くない関係をそれより悪くならないようにしようとする時に使われると考えられる句の一つである。

表4の各列を順にみよう。表中の記号は2種類ある。たとえば、VCはベトナムから中国に送られた祝電の中で、越中関係について何をいっているかという意味である。その下のVとかCはベトナムについて、あるいは中国について

表4 両国関係についての定句

	VC		CV		VS		SV		CS		SC	
	(V)	(C)	(C)	(V)	(V)	(S)	(S)	(V)	(C)	(S)	(S)	(C)
1964	唇 歯 (ML)		なし (MLPI)		なし		ML		MLPI		なし	
1965	唇 歯 (MLPI/PI)		唇 歯		なし		MLPI		なし (MLPI)		なし	
1966	唇 歯 (ML/ML/ MLMao/PI)		唇 歯		なし		なし		なし		なし (MLPI)	
1967	唇 歯 (MLMao/ PI/PI)		唇 歯		なし (MLPI)		なし		なし		なし (MLPI)	
1968	MLPI (MLMao)		なし		なし (MLPI)		なし		なし		なし	
1969	な し (MLMao)		なし		なし (PI)		なし (PI)	(ML)	なし		なし (PI)	
1970	MLPI (MLMao)		なし		なし (PI)		なし (PI)		平和共存		なし (MLPI)	
1971	唇 歯同志兄弟 (MLMao)		なし		MLPI		なし (PI)		平和共存		なし (MLPI)	
1972	同志兄弟		なし		MLPI		なし (PI)		平和共存		なし (MLPI)	
1973	同志兄弟 MLPI		なし		MLPI		MLPI		平和共存		内政不干渉	
1974	MLPI		MLPI		MLPI		MLPI (PI)		なし		なし	
1975	同志兄弟 PI		なし		MLPI		なし (ML)		なし		L	
1976	な し		なし		なし		なし (PI/MLPI)		平和共存 内政不干渉		内政不干渉	
1977	同志兄弟 (MLPI)		なし		MLPI (ML)		なし (SI)	(ML)	平和共存		内政不干渉	
1978	MLPI		なし		MLPI		なし (PI)		なし		平和共存	
1979	な し		なし		なし (PI)		MLPI		平和共存		平和共存	
1980	な し		なし		なし (LI/PI)		なし (LI)		平和共存 内政不干渉		平和共存	

- 略号: VC ベトナムから中国への祝電における両国関係についての形容  
CV 中国からベトナムへの祝電における両国関係についての形容  
VS ベトナムからソ連への祝電における両国関係についての形容  
SV ソ連からベトナムへの祝電における両国関係についての形容  
CS 中国からソ連への祝電における両国関係についての形容  
SC ソ連から中国への祝電における両国関係についての形容  
V ベトナムについての形容  
C 中国についての形容  
S ソ連についての形容  
唇 歯 唇 歯 (輔車) の関係  
ML マルクスレーニン主義  
MLPI マルクスレーニン主義とプロレタリア国際主義

PI	プロレタリア国際主義
Mao	毛沢東思想
LI	レーニンの国際主義
SI	社会主義的国際主義

て何をいっているかという意味である。

#### VC ベトナムから中国への祝電における越中関係についての形容

ベトナムは、1964年から1967年までは「唇齒」の関係として越中関係を特徴づけた。伝統的な概念に訴えながら、しかも同時に中国については、「マルクス・レーニン主義」、「プロレタリア国際主義」に則って、ベトナムを支援することを要請しているようである。1968年からは不規則になり、しかも、「唇齒」は1971年にしか用いられていない。「マルクス・レーニン主義」、「プロレタリア国際主義」あるいは「同志兄弟」という句がかわってあらわれる。1968年には、「マルクス・レーニン主義」、「プロレタリア国際主義」が使われる。1969年にはなにもなく、1970年は、「マルクス・レーニン主義」、「プロレタリア国際主義」、1971年は「唇齒」、「同志兄弟」、「マルクス・レーニン主義」、「プロレタリア国際主義」とにぎやかである。同時に、中国については、「マルクス・レーニン主義」と「毛沢東思想」で特徴づけている。これは1971年まで続く。1972年以後は「マルクス・レーニン主義」的次元で中国を特徴づけるのをやめている。越中関係についてその後は、「同志兄弟」、「マルクス・レーニン主義」、「プロレタリア国際主義」などが使われるが不規則で、よく説明できない。1973年～1975年の「プロレタリア国際主義」という句の使用は、南部軍事解放の支援要請の意味があったろう。解放後の1976年は中国援助の削減（新規援助打ち切り）についての不満があったのかなにもなく、1977年は「同志兄弟」を使い、同時に中国について、「マルクス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」で特徴づけている。1978年は、最後の要請とみられる「マルクス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」という句が使われる。1979年以後はこのような句は使われていない。

## CV 中国からベトナムへの祝電における中越関係についての形容

1964年には、中国は米国の脅威をベトナムほど強くは認めなかったのであろう。「唇齒」は使われず、自国について、「マルクス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」に則っているといっている。その後、1965年から1967年まで、米国の軍事脅威が中国にとっても激しかった期間は伝統的な概念で緊密性を意味する「唇齒」がよく使われた。その後は越中関係については、1974年の「マルクス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」に対する言及を除くと、なにも言及されない。これは、1975年の春の軍事解放を前に与えた中国の支援についての言質かもしれない。ソ連はおそらくこれと同じとみられる言質を1973年から与えている。

ベトナムについては、1969年にホーチミンが逝去した時の弔電の中で、ホーチミン自身の「プロレタリア国際主義」に言及しているのが唯一の例外である。

## VS ベトナムからソ連への祝電における越ソ関係についての形容

越中関係についてはマルクス主義の定句のみが使われる。最も目立つことは、1964年から1970年まで、何も使われないのに対し、1971年から1975年まで、「マルクス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」の定句が使われる。ベトナムについては、同じ2つの定句を1967年と1968年に使った後、1969年と1970年にソ連について、「プロレタリア国際主義」の定句を使っている。そして翌1971年から2つの定句が越ソ関係について使われる。ベトナムの眼からみると、ソ連の第2次ベトナム戦争に対する支援ははじめはとりわけものたらないものであったのではなかろうか？ ソ連は1960年代には、軍事解決と区別される政治解決を主張していたために、ベトナムにとっては不満足であったのであろう。ベトナムはまず第一に、ベトナムが基本的に正しい目標のために、良好な振舞いをしていることを示し（1967年～1968年）、第2に、ソ連について、良好な振舞いを要請し（1969年～1970年）、最後に、越ソ関係につい

でも良好であれ、と支援要請の意をこめて定句を使ったのではないであろうか？

その後、1976年には再び定句が消える。解放直後のベトナムの全方位外交の中でソ連の位置は必ずしも大きくなかっただろう。実際、中国だけでなくソ連も、ベトナム援助の努力を減退させていた。1977年と1978年には再び定句を復活させている。中国との関係悪化、米国との関係正常化の難航、ASEANとの関係悪化の中で、対ソ接近は残された唯一の途のひとつであったであろう。1979年、1980年になると、越ソ関係についてではなく、ソ連について、「プロレタリア国際主義」を使用している。これは字面通り、ソ連を讃えていると同時に、より寛大、無私で同志的な援助を要請しているとみてよいであろう。

#### SV ソ連からベトナムへの祝電におけるソ越関係についての形容

ソ越関係について、マルクス・レーニン主義の定句が使われるのは、1964年と1965年、1973年と1974年、そして1979年である。1964年の場合の「マルクス・レーニン主義」はかなり表面的で、儀礼的なものだったのかもしれない。1965年、コスイギン首相のハノイ訪問中の米国北爆開始によって、かなり強い言質をベトナムに与えざるをえなくなり、「マルクス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」の定句を1965年に使ったのであろう。しかし、その後は大国の核対決を恐れて、ソ連は政治解決を志向し、強い言質を与えていなかったようである。ただ、ソ連自体については、1969年、1971年、1972年、1974年と「プロレタリア国際主義」の定句を使う。そして、1973年と1974年には、「マルクス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」の定句を使っている。1970年代の前半は、ソ連の良好な振舞いを主張した後で、停戦協定以後から南部解放について軍事解決の支援に傾いたといつてよいと思われる。

解放後は再び熱がうすれ、自国ないしベトナムについては良好な振舞いをしていることを讃えることによって、大したことをしないですまそうとしたのではないかと思われる。1979年にはしかし、ソ越協調が強調され、「マルク

ス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」の定句が使われる。1980年には再びこの定句が消え、ソ連について、「プロレタリア国際主義」が使われる。対越援助の重さにやや疲れながらも、自国は良好な振舞いをしているといいたかったのではなかろうか？

#### CS 中国からソ連への祝電における中ソ関係についての形容

中ソ関係では、マルクス主義の定句はあまり使われない。むしろ敵性国家との関係に使われる「平和共存」の定句がよく使われる。

1964年、中国は中ソ関係について、「マルクス・レーニン主義」と、「プロレタリア国際主義」の定句を使い、1965年、自国について「マルクス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」の定句を使った後、マルクス主義の定句はもはや使われなくなった。1964年の場合は、フルシチョフ失脚後の一時的な宥和的な態度が表われたものであろうし、1965年の場合は、米国の軍事的脅威が強くなっている唯中で、少なくとも中国だけは良好な振舞いをしているといいたかったためであろう。その後1969年の軍事衝突のあと、1970年から1973年まで、敵性国家間に使われる「平和共存」が使われる。その後、1974年、1975年、1978年と国内混乱のためか、よくはわからないが、それさえも使われていない。しかし総じて、1969年以降、中国はソ連を「平和共存」の次元で考えていることを示している。このほか、「主権尊重」、「領土保全」などの定句も同時に使われ、1976年と1980年には「内政不干渉」という定句も使われている。

#### SC ソ連から中国への祝電におけるソ中関係についての形容

ソ連はソ中関係についてマルクス主義的定句を使ったのは1975年だけである。しかし、この「レーニン主義的原則」という定句がより具体的になにを意味しようとしているのか定かではない。

このほかは、1973年、1976年、1977年と「内政不干渉」を唱え、1978年か

らずっと「平和共存」を唱えている。ソ中関係の場合、「内政干渉」と「平和共存」はかなり同じことを意味しているが、多分、後者の方がより包括的で、少し強い意味で用いられているかもしれない。

ソ連の祝電で注目しなければならないのは、1966年から1972年まで(1968年の例外を除いて)、自国について「マルクス・レーニン主義」と「プロレタリア国際主義」ないし後者のみを使っていることである。ソ連は良好な振舞いをしていることをかなり長く、1969年の軍事衝突以後も主張しているのである。

#### 4 友好敵対を示すものとしての属性

越中ソ関係の友好度の測定は次のように行なう。この方法はすべてに朝中ソ関係について試された方法の変種であって、その全般的妥当性はその場合にも検証されている<sup>14)</sup>。

共産主義者の間の通信、しかも高度に計算された、限定された語法での通信が国家的記念日に交される電報の最も重要な性格である。まず第1に、お互いに相手をどのように思っているかは別としても、自らについては共産主義者であると認識している事実はその語法をきわめて限定されたものにしてている。さらに、国家的記念日に交わされる祝電であるという事実は、さらに限定された、特殊なものにしてている。国内的、国際的に重要な記念日に対する祝電は否が応でも相手国に対する利益や関心の度合を反映したものにしてしまう。このような事実のために、共産主義国の国家的記念日の祝電はきわめて簡潔ではあるが、要を得た友好敵対度の指標として使いうるものである。

祝電はさまざまな国家的記念日に交される。たとえば、独立記念日、革命記念日、建国記念日、党創立記念日、建軍記念日、条約締結記念日などである。この小論では、これらのうちで最も重要な日、独立・建国・革命記念日を取りあげる。ベトナムの9月2日、中国の10月1日、ソ連の11月7日はそのよう



な日である<sup>15)</sup>。

祝電には多くの側面があるが、中でも友好敵対度測定に直接的に関連あると思われるのが次の5つである。まず第1は祝電の長さである。これは便宜上文章の数でみる。文章の数が多いと、友好的である度合は大体高いことが経験的にわかる。たとえば1967年、翌年のテト攻勢を前にして、ベトナムのソ連に対する祝電の長さが異常であることは軍事的、政治的援助を切望していたことを示しているであろう。同様に、1977年の場合はベトナムが解放後の多くの困難の中でいわゆる全方位外交が主として米国の反対で失敗し、ソ連に頼るしかしようがなくなりつつある時期のものである。逆に、1979年の中国のベトナム介入後のベトナムの中国に対する祝電はとても短かく、文章がひとつしかない。中国はベトナムに対して、1976年以降、ソ連に対して、1973年以降（1977年の例外を除いて）祝電を少なくとも掲載していない。（中国はソ連に対して、1974年祝電を送ったが、『人民日報』には掲載されていない<sup>16)</sup>。当時、党と国家の官僚機構の大半は周恩来らを中心とした一派が固めていたのに対し、宣伝、文化、教育部門は「四人組」の一派が固めていた。前者はソ連に対して、戦術的にかなり思い切った友好の姿勢を示したのに対し、後者はこれに反対であったようである。）

第2に、宛名が組織名だけでなく、個人名を含んでいるかどうかである。組織名だけでインパーソナルに祝電を出すよりは、個人名が入っている方が友好度が高いといえる。たとえば、1975年以前では、ベトナムは中国、ソ連に対して、必ず個人名を記しているのが普通であるが、1968年は例外となっている。1968年の2月のテト攻勢に対して、中国とソ連は必ずしも満足していなかったことと関係していると思われる。中国はベトナムの「軍事冒険主義的」都市解放戦略に不満足であったろうし、米国の戦闘意志の予想外の弱さを見て、ソ連の影響力増大を憂慮したであろう。ソ連はベトナムの失敗を残念に思ったであろうし、軍事援助の必要の増大や米国の反応について、心配することもあったろう。また、中国は1966年以降、ソ連に対して個人名を使っていない。

第3に、祝電の中で「親愛なる同志」とか「敬愛する同志」という句を使っているかどうかである。使っている場合の方が使っていない場合よりも友好度が高い。たとえば、ベトナムは中国に対して、1965年と1966年、そして1974年以降、このような句を使っているかどうかである。使っている場合の方が使っていない場合よりも友好度が高い。たとえば、ベトナムは中国に対して、1965年と1966年、そして1974年以降、このような句を使っていない。ソ連に対しては、1974年から1976年まで、そして、1977年にはこのような句を使っていない。中国に対する1960年中葉のこの句の不使用は「反帝共同行動」に反対する中国文革派に対する不快感の表明であろうし、1974年以降はベトナム人の闘争における不十分な支援に対する不満足感の表明であろう。ソ連については、1974年から1976年までは、休戦協定以降のソ連の援助に対する不満足感を示すものであろうし、1979年の場合はおそらくほぼ1年前に開始されたカンブチア占領にかかる費用にソ連が不満を示したのかもしれない。

第4に、祝電が掲載される日である。国家的記念日に掲載される場合もあるし、それからやや遅れて掲載されることもある。多くの祝電が届くのが普通であるため、そのうちのどれを先に掲載するかはその国の政治的に計算された優先順位を反映するものである。傾向として、自分の国が送ったものは祝日に掲載される。また重要な国、たとえば、ベトナムにとっての中国やソ連からの祝電は同日に掲載される場合が多い。たとえば、1980年のプラウダの場合、ベトナムと中国に対する祝電は同日に掲載されるが、ベトナムからの祝電は2日遅れ、中国からののは3日遅れになっている。

第5に、祝電が新聞の何頁に掲載されるかである。1頁に掲載されるか、5頁に掲載されるかは掲載する国の政治的に計算された優先順位を反映するものである。傾向として、自分の国が送ったものは前の方に、また、重要な国からの祝電は前の方に掲載されることが多い。たとえば、1980年のプラウダの場合、ソ連からベトナムへの祝電は1頁目、中国への祝電は2頁目、ベトナムからの祝電は2日遅れの4頁目、中国からの祝電は3日遅れの4頁目となってい

る。ニャンザンの場合はほとんどすべて1頁目に掲載されている。

このような祝電の実質的内容には直接関係のない5つの側面をみて、友好敵対度を測るのが次の仕事である。ひとつの特徴だけでは必ずしもうまくとらえきれないかもしれないが、このような5つの側面を統合すれば、ほぼ満足のいく指標をつくれるのではないかという考えに基づいて、このような指標を因子分析という統計的な方法で作る<sup>17)</sup>。朝中ソ関係の分析の場合には、祝電に訴えられる政策主題と祝電の属性の両方を考慮に入れて友好敵対度の測定を行なったが、越中ソ関係の場合には次の理由で後者のみで測定を行なっている。すなわち、朝中ソ関係(1961年~1966年)の場合には、すべての主要政策課題(反帝国主義、社会主義陣営の統一と団結、祖国の統一など)は共有されていたのに対し、越中ソ関係(1964年~1980年)の場合にはすべての主要政策課題が必ずしも共有されておらず、たとえば「反覇権主義」は反ソを意味したり、反中を意味したりする。

因子分析は多くの変数に共通する次元をとりだし、その次元の上に観察されたものを並べる方法である<sup>18)</sup>。この場合では、とりあつかう変数はすべて友好敵対度に関連するものなので、まず最初に抽出される次元は友好敵対の次元であることははじめから期待されている。第1次元の各変数の因子負荷量をみると、文章の数、「親愛なる同志」の有無、個人名の有無が正の方に固まり、掲載日の隔離、掲載頁の2つが負の方に固まっている(表5)。前3者の場合、値

表5 因子分析の結果

回転前の固有値の分散に対する比率						
第1因子 47.4%						
第2因子 19.9%						
バリマックスでいう回転後の因子負荷量						
	個人名	親愛なる同志	文章	頁	日	
第1因子	0.84	0.71	0.80	-0.07	-0.25	
第2因子	-0.30	0.06	-0.15	0.45	0.09	

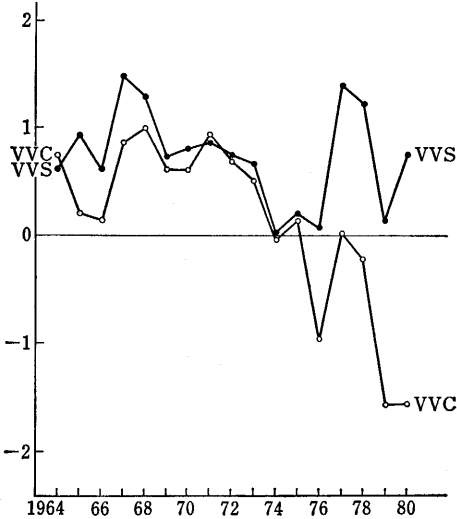
が大であればあるほど敵対的とみなされるので、この軸は友好敵対度を強く表現しているとみてよいであろう。説明率はかなり高く、47.4%となっている。(これはバリマックス回転以前の説明率である。)第2次元以下の値はこの作業にとって意味がないのでここではそれについての議論は省略する。

次に各祝電のこの友好敵対尺度の上の位置をみてみよう。ここで重要なことは次の区別である。同じ祝電が発信国と受信国で通常掲載されるために、2国間関係について4つの友好敵対についてパラメーターがえられる。掲載国 X, 発信国 Y, 受信国 Z とすると, AAB, ABA, BAB, BBA の4つである。ここでベトナムを V, , 中国を C, ソ連を S, とすると, 次の12のパラメーターがえられる。

	掲 載 国	発 信 国	受 信 国
VVC	ベトナム	ベトナム	中国
VVS	ベトナム	ベトナム	ソ連
VCV	ベトナム	中国	ベトナム
VSV	ベトナム	ソ連	ベトナム
CCV	中国	中国	ベトナム
CCS	中国	中国	ソ連
CVC	中国	ベトナム	中国
CSC	中国	ソ連	中国
SSV	ソ連	ソ連	ベトナム
SSC	ソ連	ソ連	中国
SVS	ソ連	ベトナム	ソ連
SCS	ソ連	中国	ソ連

まず『ニャンザン』に掲載されたものをみよう。第1に気づくことは、VVC

図1 ベトナムの送る祝電の友好敵対度



とVVSはともに少なくとも1975年まではきわめて高い水準で同じような動きを示していることである(図1)。ベトナムは意識的に均衡を中ソ両国に取っていたことを示していよう。第2に重要なのは、1975年以降、中ソ両国に対する友好度は大きく乖離したことである。しかも反比例するような動きを示していることである。南部解放以後、とりわけ中国は支持の度合を急速に落し、1978年までに完全に停止する。1979年には武力衝突へとつながる。第3に、より個別的な点として、テト攻勢前後の支援の要請を示しているとみられる友好度の上昇、その後のほぼ一貫した減少、さらに、全方位外交がほぼ失敗になりかかり、中国との対立が決定的になっていた1977年、1978年の対ソ友好表現の上昇が目立つ。

次にVCVとVSVをみよう(図2)。第1に顕著なのは、テト攻勢の1968年、南部解放の1年後の1976年に、ともに大きく下降していることである。CCVとSSVがとくにそれほど極端な動きをみせていないことから考えても、ベトナムの不満感を反映しているものとみてよいであろう。第2に注目すべきは、

図2 ベトナムの受けとる祝電の友好敵対度

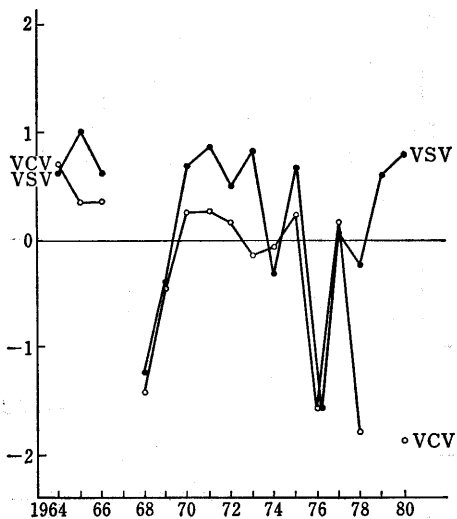


図3 中国の送る祝電の友好敵対度

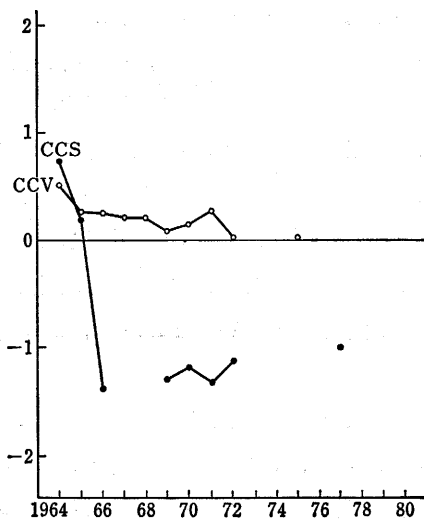
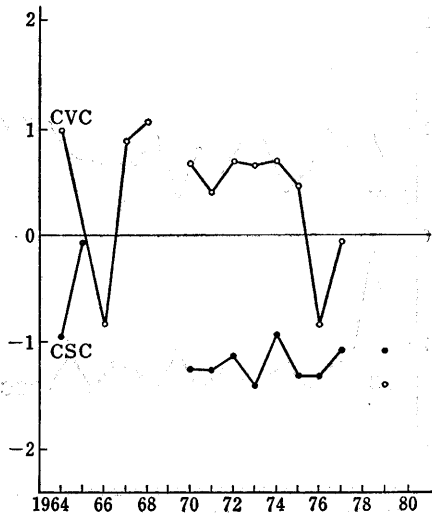


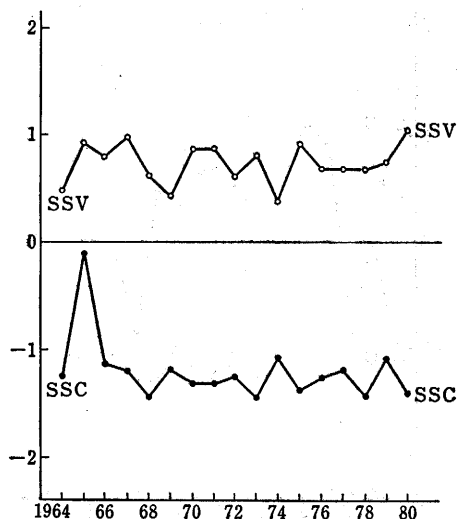
図4 中国の受けとる祝電の友好敵対度



VSV は解放後に限ると 1979 年以降大きな値を示しているのに対して、VVS は 1977 年と 1978 年に大きな値を示しているのと対照的である。ベトナムが友好強化をはやくから提言しているのに対し、ソ連の反応は少し遅れがちであったことを示しているのかもしれない。

次に、『人民日報』に掲載されたものをみよう。まず CCV と CCS をみよう (図 3)。どちらも掲載されないか、あるいはそもそも発信されない場合がかなり多いことがまず指摘される。とくに、双方に対して、1973 年のパリ協定以降は 2 回の例外を除いてまったくなくなっている。国内の政治不安定 (文化大革命、林彪のクーデタ失敗、四人組の隆盛、反文革派との確執、毛沢東の死と四人組失脚、四つの近代化とその頓挫) のために、しばしば日常業務としての祝電が中断されることになったり、あるいは、はじめから政治的に「没」になったりしたのであろう。このことは、『ブラウダ』や『ニャンザン』の予測可能な恒常性、規則性と対照的である。次に CVC と CSC をみよう (図 4)。まず気がつくことは、CVC は VVC に、CSC は SSC にほぼパラレルの動きをみせ

図5 ソ連の送る祝電の友好数対度



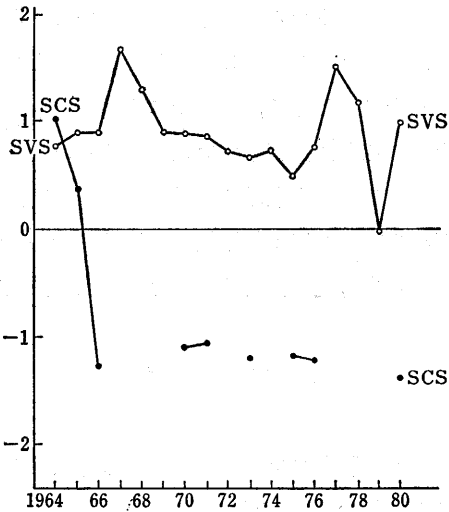
ていることである。ただ、CVCはVVCより動きが激しいこと、CVC、CSCともに、不規則性が眼に付くことである。より個性的な点としては、CVCの1966年の下降がVVCとくらべても、落ちこみが激しいことであり、反帝共同行動を唱えていたベトナムと中国の反文革派に対する中国文革派のベトナムに対する不快を示すものとみてよいかもしれない。

次に『プラウダ』に掲載されたものをみよう。まずSSCとSSVをみよう(図5)。第1に気が付くのは、安定性である。SSVはより友好的、SSCはより敵対的な水準で17年間ほぼ安定している。かなりはやい時点で形成された態度がかなり固定されて、祝電が送られ、掲載されていることを示しているとみることができる。

第2に、安定した中でも、いくつかの注目すべき変化を示していることである。SSVからみると、まず、1965年～1967年には上昇しているが、米国の大規模介入に抗して「反帝共同行動」を中国の文革派を除く東アジアの多くの共産主義者が唱えた時期であるから首肯できる。1975年は解放直後でSSVは一



図6 ソ連の受けとる祝電の友好敵対度



時上昇する。さらに、1979年と1980年に上昇している。SSCをみると、まず、「反帝共同行動」路線を唱える羅瑞卿らの一派がかなり強かった1965年の急上昇がとりわけ眼につく。10月1日は当時すでに羅らは林彪らの一派の唱える「人民戦争」路線に圧倒されていたのかもしれない。その後は、文化大革命、林彪のクーデタ失敗、四人組の台頭、毛沢東の死と四人組の失脚、四つの近代化とその頓座等の紆余曲折を経ながらもソ連の対中政策は敵意と警戒心によって一貫しているようにみえる。

SCSとSVSをみよう(図6)。SCSは中国が祝電について不規則であるために、途中切れ切れになっているが傾向ははっきりとしている。1964年フルシチン失脚を機にした中国の一時的和解姿勢、1965年の「反帝共同行動」的色彩のあと、文化大革命の1966年には一気に低い水準に下降している。その後はその水準に留まっている。SVSはVVSととくに目立った違いをみせていない。1967年と1968年、1977年と1978年の高い値がとくに目立つ。

ベトナム、中国、ソ連の祝電発信と掲載についてみられる特徴としてあげられるのは次のことである。ベトナムは祝電の取り扱いにきわめて注意深く、細心であり、態度表明が明快であるように思われる。中国とソ連の両大国を丁重に扱いながらも、好きなことは好き、嫌いなことは嫌いといっているようにみえる。中国は祝電をそれほど重大視していないようにみえる。不規則性はそのことを示している。とくに、社会主義陣営諸国との祝電交換はベトナムやソ連にくらべると比重が小さい。ソ連は規則性と定型性において最も顕著である。ベトナムと中国に対する友好度の表現もきわめて変化の少ない型を示している。

## 5 結 語

以上、第2次ベトナム戦争のアメリカの大規模介入期から中国のベトナム進攻を含む10数年間の越中ソ関係を数量的に跡づける作業を行なった。これに続く「軍事力の分布と対外行動」についてのより深い分析<sup>19)</sup>のための探索的分析ではあったが、従来知られていた事柄に加えて、よりきめのこまかい友好敵対度の変遷が明らかになったといえよう。

- 1) International Institute for Strategic Studies, *The Military Balance, 1980-1981*, London: IISS, 1980.
- 2) ベトナムの対外関係については次を参照。Gareth Porter, *Vietnam: The Definitive Documentation of Human Decisions*, Tokyo: Publishers International Corporation, 1979; Alexander B. Woodside, *Community and Revolution in Modern Vietnam*, Boston: Houghton Mifflin, 1976; Frances Fitzgerald, *Fire in the Lake: The Vietnamese and the Americans in Vietnam*, New York: Vintage Books, 1973; William S. Turley, ed., *Vietnamese Communism in Comparative Perspective*, Boulder, Colorado: Westview Press, 1980; Ministry of Foreign Affairs, Socialist Republic of Vietnam, *The Truth about Viet Nam-China Relations Over the Last 30 Years*, Hanoi, 1979; Department of Press and Information of the Ministry of Foreign Affairs of Democratic Kampuchea, *Black Paper, Facts and Evidences of the Acts of Aggression and*

- Annexation of Vietnam against Kampuchea*, Phnom Penh, 1978; King Chen, *Vietnam and China, 1938-1954*, Princeton: Princeton University Press, 1969; Donald S. Zagoria, *Vietnam Triangle, Moscow, Peking, Hanoi*, Indianapolis: Indiana University Press, 1967.
- 3) 中ソ関係については次を参照。Donald S. Zagoria, *The Sino-Soviet Conflict, 1956-1961*, Princeton: Princeton University Press, 1962; O. Edmund Clubb, *China and Russia: The "Great Game"*, N. Y.: Columbia University Press, 1971; William E. Griffith, *Sino-Soviet Relations, 1964-1965*, Cambridge, Mass.: M. I. T. Press, 1966.
  - 4) 中越関係については次を参照。King Chen, *op. cit.*; D. S. Zagoria, *op. cit.* (1967); 猪口孝「中国のベトナム干渉, 1789年と1979年」『アジア研究』第27巻第2号(1980年7月), 1-42頁。
  - 5) Richard Wich, *Sino-Soviet Crisis Politics*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1980.
  - 6) Douglas Pike, "The Impact of the Sino-Soviet Dispute on Southeast Asia," Paper Prepared for the Conference on "The Sino-Soviet Dispute: The Seventies and Beyond," Seattle, October 30 - November 1, 1980.
  - 7) 猪口孝「前掲論文」(『アジア研究』), 「伝統的東アジア世界秩序試論——18世紀末の中国のベトナム干渉を中心として」『国際法外交雑誌』第73巻, 第5号(昭和52年2月), 36-83頁; 『外交態様の比較研究——中国・英国・日本』東京: 巖南堂, 1978年; 猪口孝・古田元夫『18世紀末ベトナムの西山運動の歴史的評価——ベトナムの歴史家ヴァン・タン氏の最近作に関連して』東京; 上智大学国際関係研究所, 1976年。Takashi Inoguchi, "World Events as Seen from the Periphery: Vietnam," in H. R. Alker, T. Biersteker, I. Gilani, and T. Inoguchi, *Dialectics of World Order*, forthcoming. なお第2番目の論文に対するベトナム人のコメントとして次の記事がある。Văn Tân, "Chiến Thắng Ngọc Hồi-Dống Đa Du'ó'i Con Mắt Của Một Nhà Khoa Học Nhật Bản," *Quân Đội Nhân Dân*, ヴァン・タン「日本人学者からみたゴック・ホイー・ドンダ戦勝」ベトナム人民軍機関紙『人民の軍隊』1979年2月1日。この記事がでる前の1975年~1976年にヴァン・タン氏は私宛により詳細なコメントを送っている。このことについては猪口・古田共著のモノグラフを参照。
  - 8) 猪口孝『国際関係の数量分析——北京・平壤・モスクワ, 1961年~1966年』東京: 巖南堂, 1970年; Takashi Inoguchi, "Measuring Friendship and Hostility among Communist Powers: Unobtrusive Measures of Esoteric Communication," *Social Science Research*, Vol. 1, No. 1 (April 1972), pp. 79-105.
  - 9) Gareth Porter, "Vietnam and the Socialist Camp: Center or Periphery?" in William S. Turley, ed., *op. cit.*, pp. 225-264.

- 10) John Garver, "Chinese Foreign Policy in 1970: The Tilt towards the Soviet Union," *China Quarterly*, No. 82 (June 1980), pp. 214-249.
- 11) Kenneth Lieberthal, "Sino-Soviet Conflict in the 1970's: The Background in Chinese Politics," Paper Prepared for the Conference on "Sino-Soviet Conflict: The Seventies and Beyond," Seattle, October 30-November 1, 1980.
- 12) U S Government, Foreign Broadcasting Information Service, *Daily Report, People's Republic of China*, November 7, 1974, p. A-1.
- 13) このような定句について調べることはいわゆるクレムリノロジー的分析では常套手段である。W. E. Griffith, "Communist Esoteric Communications: *Explication de Texte*," in Ithiel de Sola Pool et al, eds., *Handbook on Communication*, Chicago: Rand McNally, 1973, pp. 512-520.
- 14) Inoguchi, *op. cit.*
- 15) 1969年、ホーチミンの死が独立記念日と相前後したため、やや不規則なことを起きた。このため、ホーチミンの逝去に対する弔電を含めた。
- 16) 註(12)を参照。
- 17) 朝中ソ関係について友好敵対度を測定した時には、このような祝電の実質的内容に直接関係のない側面とある側面の両方をみて行なったが、今回は前者の側面に限っている。ひとつには、扱う期間が長いこともあって祝電でアピールされている主題をうまく抽出しにくいことがあった。
- 18) Harry Harman, *Modern Factor Analysis*, Chicago: University of Chicago Press, 1960; 三宅一郎『社会科学のための統計パッケージ』東京: 東洋経済新報社, 1978。朝中ソ関係の測定の時数量化理論第3類を使ったが、今回は因子分析(バリマックス回転)を使った。前回は質的データ(たとえば、A ないし、非A)を多く含んでいたこともあって、数量化理論第3類を使ったが、今回はとくにその問題はなかった。今回の測定に数量化理論第3類も使ってみたが、量的データを質的データ(分類データ、たとえば A, B, C)に変換する途中で失われた情報がかなりにのぼり、因子分析を使った場合よりもこまかい違いをよく再現しないことがわかった。数量化理論については、次を参照。林知己夫・樋口伊佐夫・駒沢勉『情報処理と統計数理』東京: 産業図書, 1975年; 三宅一郎『前掲書』。
- 19) Takashi Inoguchi, "Dynamics of Realignment: Hanoi, Beijing, and Moscow, 1964-1980," Paper Presented at the 17th North American Peace Science Conference, Philadelphia, November 9-11, 1981.